

新聞『日本』に見る古島一雄の東洋観

—時事短評欄「雲間寸観」を中心に—

戸松 幸一

0 はじめに 問題関心

0.1 本稿の目的と構成

本稿は新聞『日本』時代の古島一雄執筆の言説に注目し、その東洋観を明らかにする。対象は時事評論（コラム）欄「雲間寸観」である。

古島一雄に関する先行研究（松本 1965、時任 1984、中村 2005）は、その多くが晩年に古島自身の執筆した回顧録を主な史料としており（古島 1950 など）、明治時代の言説を精査した研究は見当たらない。本稿は『日本』に掲載された時事コラム欄「雲間寸観」を扱うことで、これまで見落とされてきた若年期の古島の残した文書に注目する。

新聞『日本』は陸羯南が主筆を務めた明治期の硬派な政論紙である。多くの先行研究が存在する（有山 2007、朴 2008、松田 2008、片山 2011 など）が、これらほとんどは陸羯南の思想を主眼に据えたものである。福本日南（広瀬 2004）、鈴木虎雄（中野目 2014）、五百木良三（石川 2019）を対象としたものはあるが、古島を中心に据えたものはない。

「雲間寸観」の取り上げる題材は内閣や政党、選挙のほか、宗教、教育など多岐にわたる。そのなかで本稿がアジア観（対外論、アジア制作観）を中心に据える理由は以下の3点である。

1. 古島一雄の政界進出後に取り組んだ主な問題が中国問題であること。
2. 『日本』において「雲間寸観」の連載された明治34（1901）年～37（1904）年はロシアの満州撤兵問題から対露開戦に向かう時期であり、日本社会の関心が朝鮮半島・満州に大きく向けられていたこと。
3. 「雲間寸観」全体のなかで、アジア外交を中心に扱う内容が比較的多いこと。

表0-1は「雲間寸観」掲載開始から終了までの約3年間のなかで、中心的な話題として取り上げられた題材を集計したものである（『復刻版 日本』1988-1992 ゆまに書房による）。1回の掲載で取り上げられる話題は複数であることが多く、たとえばロシアの満州撤兵問題についての軍部の対応を批判したものであれば、「ロシア」「中国」「軍部」をカウントしている。伊藤博文が取り上げられる場合、政友会党首として話題に上る場合は「政党」に、伊藤の人物や性格を中心に据えたものであれば「人物」にカウントする。

話題は多岐に及ぶが、農事や水産に言及されることは少ない。政論紙の短評欄で内政批判が多いのは自然だが、外交関連の話題で、日英同盟締結前後であるにもかかわらず「西欧」（多くが英独仏のいずれか）よりも「中国」についての話題が多いのは注目すべきだろう。36 年半ば以降はロシアの話題が多いが、これは言うまでもなく満州撤兵問題と日露戦争に絡んだものである。「雲間寸観」の東アジアへの関心の高さがうかがえる。

表0-1 「雲間寸観」の話題

年	月	外交					内政										国内外問わず			
		中国	韓国	ロシア	米国	西欧	台湾	皇族 華族	藩閥	元老	内閣 大臣	官僚	政党	議会 選挙	学問 教育	宗教	社会 経済	軍事 戦争	人物	その他
M34	11~12月	4	0	0	1	1	0	1	0	1	2	0	7	10	4	0	2	13	1	0
M35	1~4月	14	1	3	1	15	3	2	3	4	12	0	7	13	8	0	21	37	15	8
	5~8月	15	1	4	0	5	2	0	3	1	9	3	2	26	14	2	11	27	19	5
M36	9~12月	6	5	0	0	7	1	1	3	9	4	3	5	7	26	0	11	27	34	3
	1~4月	2	0	0	0	0	0	1	0	0	4	3	8	8	8	4	16	5	11	5
	5~8月	8	3	11	0	1	1	0	2	2	11	2	26	11	1	0	8	9	10	1
M37	9~12月	2	0	33	0	0	1	0	1	6	8	2	7	2	5	0	10	7	14	1
	1~4月	4	4	41	2	2	0	3	0	5	4	0	3	7	1	2	6	35	6	5
	5~8月	5	4	59	1	8	0	0	1	5	1	0	3	2	6	0	13	45	0	1
	9~12月	8	2	31	7	9	0	0	0	3	0	0	0	4	3	0	10	28	0	0
	計	68	20	182	12	48	8	8	13	36	55	13	68	90	76	8	108	233	110	29

丸山眞男によって日本新聞社や政教社の思想が「健康なナショナリズム」と評されたことはよく知られるが（丸山 1947）、これは言うまでもなく日中戦争前夜から太平洋戦争終戦時までの「不健康なウルトラナショナリズム」と対照されている。

ナショナリズムに「健康」、「不健康」といった価値判断を下すことが有効かどうか。有効だとして、その判断はいかなる基準によって下され得るか。この問いに答えるための一つの手段は、「政教社グループ」に属した人々のその後の思想や行動を明らかにすることだろう。羯南は明治末期に病に没しその思想や政治活動が途絶えたため、その後については雪嶺のそれによって評価されがちである。本稿は古島の思想と行動を、このグループからのもう一つの派生であり帰結であると見る。

また古島は後に政治家として日中親善に力を注ぎ、孫文や黄興のほか、日本のアジア主義者との親交が深かった。後に見るように、同時代のアジア主義思想は近衛篤磨を中心に語られることが多いが、古島のアジア観（対アジア政策観）はこれに近い位置にありながら性質を異にしている。これまで見逃されてきた当時の日本に存在した思想の伏流である。本研究はその第一段階にあたる時代、明治期の古島の言論を明らかにする試みと位置付ける。

第1節では「雲間寸観」に見える清韓との外交観を、第2節では同時代に加熱していた満州におけるロシアとそれに関わる国内での動向についての評論を扱う。得られた知見から第3節で古島の東洋観とその可能性について考察する。

0.2 古島一雄と「雲間寸観」

ここで古島一雄の経歴に触れておきたい。古島は慶応元（1865）年8月1日生まれ。明治12（以下特に記載のない年号は明治。適宜西暦を付記する）年に豊岡藩勘定方であった祖父良平の知己を頼り上京、濱尾新に寄寓するも、通う学校でトラブルを起こし次々と放校処分。22（1889）

年、杉浦重剛の導きで日本新聞社に入社する。

陸羯南の政論紙『日本』に長く携わったのち、雑誌『日本及日本人』や新聞『万朝報』にも関わり、44（1911）年に東京市衆議院議員補欠選挙に当選する。犬養毅の参謀として憲政擁護運動で活躍、五・一五事件で犬養が暗殺され隠遁生活に入る。昭和 21（1946）年には自由党総裁に推されるが老齢を理由にこれを固辞、吉田茂を推薦して、以後吉田総理の「ご意見番」として政界に影響力を放つ。昭和 27（1952）年 5 月 26 日没（略歴は古島 1950、中村 2005 の略年表を参照した）。

「雲間寸観」は 34（1901）年 11 月から 37 年 12 月までのおよそ 3 年間にわたり掲載された。古島は 39 年末に日本新聞社を退社し翌年初から政教社発行の雑誌『日本及日本人』にて同名のコラム欄を長期掲載している。以下は大正期のジャーナリストで『木堂雑誌』の編集などを手掛けた鷺尾義直（金野 1956）による『日本及日本人』時代の「雲間寸観」についての回顧である。

而して吾が古島翁は、爾来毎月二回同誌〔『日本及日本人』〕上の「雲間寸観」欄に得意の筆陣を張った。やがて夫れは同誌の呼び物となり、異色ある讀物として當時の讀書会に歓迎された。（略）

猶、「雲間寸観」欄は、「日本」新聞時代既に設けられていたが、それは硯滴とか余録とかいふ風のものであつた。然るに、『日本及日本人』は、毎號全一頁を割いて之れに宛て、主として内外に互る時事論評を試みるやうになつたのである。（鷺尾 1945:270）

鷺尾は『日本』時代の「雲間寸観」を「硯滴とか余録とかいふ風のもの」と評している。この種の匿名記者によるコラム欄は現在、日本のどの新聞にも見られるものだが、鷺尾が例示している「硯滴」（『大阪毎日新聞』、のちに「余録」に改題）は 35 年から、今日ではおそらく最も著名な「天声人語」（『大阪朝日新聞』）は明治 37（1904）年からの掲載であり、「雲間寸観」のほうが古い。ただし最古というわけではなく、管見の限り『萬朝報』の「筆の垢」（32 年、のちに「机の塵」に改題）が初である。

また今日これらのコラムは 1 面に掲載されるのが常だが、明治期には例外的な場合を除きほとんどが 2 面の中段または下段に掲載されている。「雲間寸観」は風刺的な冗談に終始することもあるが、当時としてはくだけた文体ながら政治・経済・教育など多岐にわたる問題に関して直截な見解と所感を述べている日が多い。

「雲間寸観」が掲載された期間は新聞『日本』経営の転換期に当たる。経営悪化のため近衛篤麿の援助を仰ぎ、羯南は洋行するなど紙面への影響力を弱め、それに代わって近衛の国民同盟会の息のかかった社員により週 1 回の増刊「日本週報」が独自の言論を展開する。37 年初に近衛が没するとほぼ時を同じくして羯南も結核療養のため東京を離れる。

この間、『日本』の論調は「日本週報」と本紙の社説「日本」（無署名のため羯南が書いたものかどうかは不明）、および社説と交替で掲載された須崎芳三郎による「論説」のあいだで、特に満州における対露政策において隔たりが存在した。

「雲間寸観」はほとんどが無署名であるが、なかには署名されたものもある。36 年 11 月に

入社した長谷川如是閑が一部執筆していたとの証言も残っており、すべてが古島の執筆というわけではない（志賀 1980:488）。しかし「雲間寸観」は後に雑誌『日本及日本人』にて古島一雄の担当するコラム欄として継続している（鷲尾 1950:270）。『日本』の同欄においても論調の乱れがみられないことから、他の記者が執筆する日があるとしても、事実上の編集長であった古島が統括し、内容や論旨についても調整があったと見るべきだろう。

1 東洋観Ⅰ 清国・朝鮮半島

1.1 清国 北清分捕事件と公使館附武官

「雲間寸観」掲載開始当初に世間を賑わせていたのが「北清分捕事件」である。義和団事変の折に日本軍が北京にて掠奪を行ったことが明るみとなり、軍を率いた陸軍第五師団長の山口素臣中将と略奪行為に直接関わったとされる将校がその責を問われ軍法会議にかけられた事件である。北京陥落時における八カ国連合軍の掠奪行為は世界で物議を醸した。「雲間寸観」でこの事件を主に取り扱った日は15回あるが、そのうち主張のはっきりしたもの、東洋観が読み取れるものを引用する（以下、別の話題も同様）。

無辜を虐殺して黒竜江の流を横溢せしめたり、婦人を強姦して暴虐至る所なからしめたる某国軍隊の行為に比すれば、我軍隊の一部が僅かに分捕くらゐで済んだのは先づ結構である、が併し此の処分を其儘にすれば将来恐るべき軍紀の墮廃を来たすことだらう（34.12.23。引用末尾の括弧内は明治年号.月.日。以下同じ）

軍部批判、特に人事に属するものが目立つ。分捕事件に続き、35年2月には東北地方の陸軍演習中に起きた兵士の大量凍死事件が紙面を賑わせた。陸軍の不祥事が相次いだ要因として、参謀次長の寺内正毅の名が繰り返しがっている。

川上が死んで寺内の時代となつてからは、参謀本部はマルデ活動力を失ひ、陸軍省からはイヂメられ、外務省からは相談にも遣つて来ぬといふ姿である（35.2.20）

ここで寺内を批判する一方で持ち上げられている前任の参謀次長とは川上操六、軍事のみならず人格的にも評判の高かった薩摩閥の人物である。古島は薩摩最良というわけではない。しかしこの頃の陸軍の長州閥が過剰に幅を利かせる状況を問題視していた。

清国公使館附武官の梶川少佐が死んだので、参謀本部は目下其の後任者選定中であるが、此の位地頗る選択を要すること、欧羅巴強国の公使館附武官よりも必要じや、多子済々の評ある参謀本部でも、其の適任者を得ることが余程面倒と見える（35.7.27）

自死した梶川重太郎少佐の後任について「雲間寸観」は数日に渡り論議している。この役職を重要視するのはロシアとの関係があるためである。「清国公使館附武官は必ずしも少佐中佐に限らず、此際大切の場合だから是非将官を持つて行つてほしい、現に露国などはオーガツク

少将といふ、久しく日本にも居たことのある、油断の成らぬ人を清国公使館附として置く、我海軍でも久しく既に大佐を遣つて居る」(同)。

適任者を人柄だけで選ぶなら難しくないが、「支那語ができて英語も話し人物も立派だといふ三拍子揃った武官はなかなか見当たらない」と述べたうえで、「福島〔安正〕少将が適任だろう」としている。しかし後任は福島ではなく、山根武亮少将が選ばれた。

日清戦争前迄は、外交でも軍事でも、其他万事万端支那を度外に置いたが、近來は打つて變つて清国に重きを置くやうに成つた(略)、第一流の人間が行くやうに成つて來た▲それで外交官の事はマア後廻はしにして、以前公使館附武官は精々中佐か少佐であつたが今度は一躍して地位を高め、陸軍少将山根武亮君が公使館附武官に成つた、将官で此の役を務めるのは、目下の処で清国公使館より外にどこにも無い (35.8.22)

翌日の「雲間寸観」も山根武亮少将のエピソードが続いている。非藩閥出身(信濃国松本)の福島安正が着任しなかったのは本意でないものの、佐官から将官に変わったことは評価する。政府の対清外交姿勢については以下のような批判もある。古島の問題意識の高さがうかがえる。

昨日午前九時半着の列車で一向十八人の清国武官が新橋についた、(略)此一行の武官はいずれもバリバリの連中で、最下級のものでも連隊長以上の人物で、(略)北京に於て一大勢力を持つて居る人物、西太后が非常に信頼されて行々は彼の永祿の位置に坐るといふことぢやが、(略)とにかく此の一行は大に注意すべき有力なお客様で、いづれも一見して人品卑しからず見受けられた▲所で驚いたのは、それほどの珍客が見えたに拘はらず、外務省、陸軍省、参謀本部に一人の大臣否な一人の総務長官乃至局長も出迎へず、一人の将官否な一人の大佐位も出迎へんで、僅に参謀本部から小山少佐が來た居た位ぢやつた、平素は特別に親密の意を示しながら、こんな間拔けたザマは何の事ぢやらう (36.10.28)

この頃は国際的な輿論も清国保全にまともりつつあった。しかしこの「保全」は日本を含む列強の意思であり、清国政府の主体的な意思ではない。公使附武官の位階を上げ、然るべき作法で出迎えよとするこの短評には、まずは清国を対等な国家と認めるべきであるという姿勢が表れる。

清国への見解を端的に示した文章として、日本の教育制度を研究するため來日していた中国の学者、吳汝綸が帰国する際に、副島種臣を訪ねたエピソードを挙げることができる。

時に老伯〔副島〕の曰く、今日足下とお話するのは、日本人たる副島種臣が、支那人たる吳汝綸君と対話するのでなく、お互に孔子の門下生として道を談ずるのであるから、どうぞ其積りで……▲さアそれから老伯は支那現今の形勢から、儒教の衰へて徒らに空言のみ存すること、清国の振はざる所以、各省督撫の人物、施設、其他あらゆる清国の悪弊を列举して、縷々数万言、猶未だ尽きずといふ有様である (同)

午前九時に副島を訪れた呉は晩食を共にして夜に入っても談話が尽きず、十時を過ぎたので暇を告げようとしたが、「苟くも孔門の弟子がお互に道を談じ徳を講ずるに於て、夜の深きを厭う道理やある、十一時に成らうが、十二時に成らうが、更らに迷惑は仕らぬと言つて、依然談話を続けられた▲呉汝綸は最初から唯『不堪慚愧、々々々々』の一点張りで、老伯の数万言に對し、是れまた『不堪慚愧』の数万言を繰返へすのみで、十二時過ぎに至り漸つと帰宅したとのことである」(35.10.4)。

第三者としての寸評もなく、伝え聞くところの二人の人物の言動を淡々と述べるこの文章において、副島種臣の詠嘆も呉汝綸の慚愧の念も、ともにそのまま古島の思いでもあっただろう。ここに「政治論説」としての客観性はない。日清の政策に対し何か主張があるわけでもない。うかがえるのは「コラム」としての主観性であり、直截な共感と同情心である。

以上、「雲間寸観」のなかで取り上げられた中国(清国)観を見てきた。韓国についての短評は比較的少ないが、日本と関係はより密接である。

1.2 朝鮮 青木と伊藤の訪朝

日露戦争が勃発した明治37年、青木周蔵と伊藤博文が相次いで朝鮮に赴く。

伊藤の朝鮮大使なども只だの御慰問ならよいが朝鮮を分割してもよいと思つて居るやうな男に朝鮮の御使番は危険千番である、まして我利々々亡者の青木などを朝鮮にやつておたまりこぶしがあるものかと云つて居るものがある(37.3.18)

満韓交換論を唱える両者に対して痛烈な批判である。以下のようなエピソードもある。

韓国京城に於ける外部の夜会で、〔伊藤博文〕春畝先生ヤフラ立ち上り、只山川草木禽獣がある計りでは国家と云ふものにならない、之に人間が居て、云々と、国家社会学のABCを説き出した所が、完順君李載冕(りさいべん)は、誰憚らぬ大声で、そんな事は己でも知つておる、誰れでも知つておると饒舌り出し、李址溶に注意せられて、漸く黙したそうだ、大分面白い老爺だと見える(37.4.9)

この頃は日露開戦にあたって日韓議定書が締結されており、朝鮮半島は日本の植民地化に向け動き出していた。「雲間寸観」はこれに異を唱えてはいない。「朝鮮経営は愁眉の急だが一向に捗らない」としたうえで、有為の人材を派遣する必要を訴えつつ、「金のある奴は肝がない、肝のある奴は金がない」として、その人選の難しさに触れている。「乱国の経営は金の仕事よりは肝の仕事」だからである(37.6.26)。

朝鮮保全は『日本』の以前からの主張だが、放っておけばロシアによる侵略を受けその後は日本の独立が危うくなる。朝鮮(大韓帝国)を「乱国」と見なすのは、内部政情の乱れだけでなく、そうした外部からの脅威も指している。しかし朝鮮の側からすれば、そうした外患の中には日本も含まれる。朝鮮の立場を慮るのが次の評論である。

朝鮮人だってあんまり馬鹿にして貰いますまい三千方里からの領土があつて一千万の人民が居る、一寸の虫にも五分の魂だ、訳もなく他国に隷属するのを忌やがるのは日本人と大した相違のある筈がない、夫れを日本の政客などは頭から自分の者のやうに心得て好きな熱を吹く、不埒千万な咄だ▲国勢は何うあらうと独立国は独立国だ、テンから馬鹿にしてかかれば向にも虫がある、何ソの糞といふ気で突ツ掛つて来るのは当たり前だ、強国で候の優等国で候のて面をしながら何一つうまく運んだ例のないのも知れたことだ、我が邦の政事家たるもの能く自から此の病根を絶つて大に謹慎の態度を取らなければ朝鮮の事業は悉皆破滅にするから見て居れ▲とは抑も何人の御名説かと云へば例の大勤位閣下ださうだ、一時この人が朝鮮顧問になるとか副王になるとか色々の噂があつたが何時の間にかオヂヤンになつた、誠に惜しい事をしたといふものが官妓以外にもイクラかあるかしらむ (37.8.20)

素朴な同情が伺える。一方で、朝鮮の「経営」についてはさらに一步を踏み出すべきであるとの主張も行っている。

朝鮮を顧問攻めにするのは未だ形式の六ヶ敷かつた昔の事だ、モウ外国でも日本の保護国同然に見て居る今日顧問も中形もあつたものではない、実力を握つたからには少しは人の眼に付かぬ実のある仕事もできさうなものだ、下らぬ事まで仰々しく京城電報となつて世界を飛び廻るやうでは心細い (37.9.9)

「雲間寸観」に見える中国、韓国に対する態度をそれぞれ見てきた。福澤諭吉が脱亜論を主張する中、古島のアジア観はいわば同情的な批判であり、政策的というよりは人情的な詠嘆が色濃い。

2 東洋観Ⅱ 満州問題とロシア

2.1 満州 対露同盟会と「日本週報」

この頃、国民同盟会は日英同盟の結成を機にいったん解散するが、ロシアが満州から撤兵しないため対露同志会の名で再出発する。その構成員には、会長の近衛はもとより委員長の神鞭知常や玄洋社の頭山満など『日本』と関わりの深い者が少なくない。清韓保全を主張し、伊藤博文らの対露軟派に反対の立場をとる点では『日本』の論調と同一だが、対露同志会は早い時期から対露開戦を主張している。

『日本』本紙の陸羯南はかねて社説の中で、満州保全を主張しつつ日露の協商や列強による共同統治を模索しており、逼迫した問題の平和的な解決を見出す努力を行うべきだと主張していた（たとえば「露国と清廷（満州占領は清廷の黙諾）」33.11.11-12）。「雲間寸観」は同志会結成直前にあたる7月29日にこのように伝える。

谷將軍曰く對外硬などと強いことを言ふから必ず強よいとも限らん（略）今が戦争の時機じやなぞと言ふ事は机上の空論だ軍艦の噸数の比較や兵隊の數位を基礎としての時機論は小兒の議論じや兵家の所謂時機なるものは外に在るのじや (36.7.29)

不平將軍として知られる谷干城は明治初期から対外硬の立場だが、日露開戦については最後まで反対の立場をとった。もとは『日本』の中心的な資金援助者であったが、この頃には疎遠となっている。立場を異にし始めている谷の見解を引用する意図は明白である。社説「日本」も、今般の対外硬派を「玉石混交」と批判する(36.8.9)。同日の「雲間寸観」では対外硬の姿勢を認めつつ、対露同志会への懷疑を次のように吐露している。

対外硬と云ふ事に就ては何もいらぬ又何人も異存を言ふべき筈もない、殊に露国に対する国民の感情は今や実に高潮の極に達して居る、従て当局者が此国民の敵愾心を利用し得ぬと云ふ事は、寧ろ宇愚の極と言つてもよいが、近頃頻に昌道せらるる対外硬の旗色鮮明なる割合にナゼ景気が附かぬかと云ふと、第一日頃柄にもない連中が多く雜じつて居るのと第二は此連中から傳へらるる消息は、常に政府が強硬であると云ふ事の外には何もないからである(36.8.9)

「国民の敵愾心を利用」する必要を認めつつ、政府がもともと「強硬」であるならば、わざわざ対外硬のグループを作る必要はないだろうという理屈である。こうした一連の論調に対し、近衛は眉をひそめたようで、腹心の日本新聞社員、神谷卓男にこのように語ったことが没後まもなく神谷によって回顧されている。

『日本新聞の本紙と、君の週報とは、丸で別物のように成て了つたネ。』

『どうも旨く行きません。私の論は余り突飛過ぎるのでしやう。』

『そう、本紙の方では対露同志会迄、クサレ^マておるじやないか。』

(神谷卓男「病中の霞山公(四)」 「日本週報」37.2.1)

2.2 露国 開戦にいたる論調

「雲間寸観」はその後も日露のにらみ合いを「京都人の喧嘩のよう」と揶揄したり(36.10.3)、元老たちの煮え切らない態度を「二十七八年の時〔日清開戦前〕と同じこと、珍しくもない」(36.10.23)と冷やかすなど、対露同志会とは距離を置きながら進展しない状況へのいら立ちを募らせていく。

11月5日、対露同志会の頭山満、神鞭知常、工藤行幹、長谷川芳之助、大竹貫一の5名が伊藤侯の官邸を訪れ質問状により詰問しようとしたが玄関で謝絶され、伊藤は日高憲明警部を出して対応しようとし、押し問答になるという出来事があった。

この経緯は『東京日日新聞』がいち早く報道、頭山らの行動を壮士まがいの直談判のごとく報じた。同志会はしばらく黙っていたが、翌日6日に経緯の説明を試みている。

7日の「雲間寸観」は「両々対照するに伊藤侯が振舞の^マ小供らしきは勿論なりと雖も今更ら逡巡して当分之を公にせずと決したる同志会の慎重も亦呆れ返へる次第ならずや」(36.11.7)と、双方の態度を批判しつつ、「露国の満州経営はどうしたとて一度叩き伏せた上でなくちや手放すかけのものぢやない」と、事実上の開戦支持を表明している。

対露同志会は11月に伊藤博文に警告文を送付するなど対露開戦を迫る「行動」に出る。しか

し当人らが思うほどに周囲の受け止めは深刻ではなかったようで、「雲間寸観」も比較的冷やかな分析を行っている。

対露同志会ではなくて対伊同志会だなどと悪口を云ふ新聞もあるが警告事件に就て鮫島武之助は伊藤侯の為に左の如く弁明して居る、同志会の警告書は我輩も今朝の新聞紙で見たが侯は大攻撃を受けて居ると同時に廟議までも意のまま左右するエライ勢力家のやうになされてある併し我輩の知る所では侯は決して斯る実力を有して居らぬ（略）神の如き大勢力家ではないといふことがわかる（36.11.10）

このように、近衛篤磨に対して敬服の念を表明しつつ、同志会の活動への懐疑的な態度は一貫している。この時期現れた対外硬から一步引いて冷めた視線を投げることで、感情的な開戦論に傾くことを自制しているようにも読める。「雲間寸観」は積極的な開戦論から一步引いているとはいえ非戦を訴えたことはない。時流に乗ろうとして現れた短絡的な国内の「対外硬」に対する嫌悪感と、それに同調することを忌避したい思いが、この時期の「雲間寸観」から読み取れる。

国内輿論に関する論調は以上のとおりだが、満州とロシアに対してはどのようなものだったろうか。

昨今我国論が非常に激昂して居る如く、露国でもやはり敵愾心を勃興させて居る、こちらに日本魂があれば向ふにも露西亜魂があるので、苟も一強国として世界に立つて居る国民は、皆な相当な自負心と弾力とを具へて居るのぢや、然るをこちらが強く出ればどんなにでも譲歩してくるだろうなどといふ奴があるが、それはあんまり自惚れ過ぎて滑稽に近い議論ぢや▲（略）併し向ふがそれほど馬鹿にしとる所が面白いので、ここが即ち千歳の一遇、日本が世界平和の為に一大光輝を放つ時なんぢや（36.11.13）

12月になると「時局遷延」が一種の流行語となり、政府の態度を各紙が批判するようになった。「雲間寸観」もそれに同調する。

年が明けて1月3日、近衛篤磨が病に没する。外遊中の陸羯南が急遽帰国した。この間、政府は開戦に向け秘密裏に動いており、「雲間寸観」もチリから買い受けた軍艦が日本に入港する所に開戦するのではないか、できれば回向院相撲が終わってから開戦してほしいなど（37.1.12）、あとは待つのみといった風になっている。2月10日の宣戦布告を受け、翌日から戦況報告が紙面を飾るようになる。「雲間寸観」は戦況への短観を述べた後、このようなエピソードで締めくくっている。

神鞭麻湊は今朝例の同志会の故近衛公に奉る開戦報告の祭文を以て、同公の霊前に参拝するそうぢやが、それにつけても残念なは今日の戦勝を見ずにゆかれた公の身の上ぢや（37.2.11）

3 考察 東洋の義侠的言論人

3.1 「アジア主義」の潮目

平石直昭は世紀転換期のアジア主義に大きく2つの潮流があったとする。近衛篤麿の「東洋モンロー主義」と岡倉天心の「アジアは一つ」である（平石 1994:282-285）。

近衛の「東洋モンロー主義」はアメリカのモンロー主義を意識しつつ、アジア圏を経済ブロックと捉え日本がその盟主となり協同して発展するべきだとする考えである。岡倉天心の「アジアは一つ」は明治37(1904)年に米国で出版された著作『日本の目覚め(The Awareness of Japan)』と彼の死後発見された『東洋の目覚め』に見える思想で、中国とインドにアジア文化の淵源を求め、日本がこれらを統一し得るものと捉えてアジア諸国全体の連帯を主張する。

岡倉の著作は本稿の扱う時代とほぼ同時期であり、同じ国際情勢を背景として発した議論である。竹内好は日本の「アジア主義」についての論考で、次のように述べている。

岡倉天心（名は覚三）は、アジア主義者として孤立しているばかりでなく、思想家としても孤立している。彼は同時代のどの思想家とも交渉をもたなかった。そもそもアジア主義が、系譜づけられない思想であることは、何回もくり返し述べたが、彼の場合、とくにその感が深い。当然交渉をもって然るべき「政教社」の国粋論ともつながらなかったし、まして高山樗牛の日本主義など無縁だった。（略）というのは、彼はもっぱら美術界で活躍したからである。（竹内 1966=1993:329）

岡倉は明治22(1888)年に高橋健三とともに美術雑誌『国華』を創刊している。高橋は官報省に勤務していた頃から陸羯南と親交が深く、『日本』創刊時に出資を行っている。「アジアの目覚め」や「日本の目覚め」のなかに「政教社」系のテキストの引用はないが、直接の関わりはないとしても、岡倉が属していた人的交流のネットワークが政教社や日本新聞社のそれと互いに近いものであったことは確かだろう。

岡倉の文書が今日に与えるインパクトは、それが「政治」とは距離を置いた「美学」の立場から発せられていることに拠っており、かつ地理的にも遠く離れた米国で独自の論考を展開したように見える点も大きな要因だが、これが本当に「同時代のどの思想家とも交渉を」持たず、完全に「孤立」したものかどうかは疑問が残る。それぞれ距離をおきつつも、『日本』は近衛篤麿と岡倉天心という二つの「潮流」の潮目に位置していたのではないだろうか。

岡倉は当時欧米に浸透していた黄禍論に対し、こう述べる。

日本は戦争を計画し領土を拡大する野心を抱いていると、しばしば諸外国から非難される。長い間、征服、植民をくり返してきた西欧諸国にしてみれば、彼らを戦争に導いた拡大欲などに日本は動かされていないと言ったところで、それを信じるわけにもいくまい。しかしながら、日本の対外政策の歴史を検するくらいの人間ならだちにわかることは、日本が終始一貫して平和維持を希求し、万やむをえず戦争に訴えるときはまったく自衛のためにほかならぬという事実であろう。（略）北京や満州での暴虐事件や最近のキシネフでの虐殺事件を見れば、世界は、ロシア軍が一たびその蛮性を発揮したときはどんなことになるか、見当がつ

くであろう。いま極東の平和な国民のせいにされている禍の責任は、ロシアこそ負うべきである。(岡倉、1904=2012:174-182)

この後に日本のたどった道から岡倉の誤謬を指摘するのは容易だが、ここでは日本を含むアジアのロマン主義的な理想と戦争観に着目したい。

経理的に近衛の支配下にあった『日本』だが、必ずしも近衛の思想に同調したわけではなかったことは既に触れた。早い段階から日露開戦を主張した「日本週報」とは違い、陸羯南は日露開戦直前まで満州の共同統治など平和解決を模索していた形跡がある。朴羊信は「羯南に限っていえば、時期によって濃淡はあるものの、「アジア主義」の傾向はそれほど強くないと思われる」と論じている(朴 2008:203)。

坂野潤治は陸と近衛の「支那保全論」を「第一に、福沢の言葉だけの“中国の文明化”を具体的な目標にまで高めたものであること、及び第二に、日本により「独立及改革」を援助されることが朝鮮にとって、また中国にとって何を意味するかということに対する想像力の欠如において福沢の東洋盟主論と基本的な共通性が存在すること、の二点が明らかに示されている」と論じたうえで、「福沢のような陽性の侵略論と近衛や陸のような隠微な侵略論とのどちらを好むかは読者の価値判断の問題であるが、福沢のような、または徳富蘇峰のような、陽的な脱亜論的“帝国主義論”が存在しえたのは、おそらく日露戦争までであった」だろうと結論づける。つまり「侵略論」である点で大差ないとしている(坂野 1974:56)。

こうしたなか、日露開戦して半年余りが過ぎた明治 37 (1904) 年 11 月の「雲間寸観」に以下のような所感が述べられている。

米国大統領の選挙はルーズベルトの再選に決まった▲パーカーは突如として現はれ忽然として敗けた▲ルーズベルトはモンロー主義を逆さに使つて帝国主義まで押して行つた生気潑々たる豪傑、パーカーは帝国主義の罪惡を喝破して比律賓〔フィリピン〕独立を唱道する理屈家▲前者が後者を譯もなく寄り倒したのを以て小にしては米国大にしては世界の大勢を見る事が出来る」(37.11.10)

アメリカ大統領選の結果から世界の趨勢を読む。棍棒外交で軍備拡張しつつ、かつ自国を世界の警察と自認するセオドア・ルーズベルト大統領を、「モンロー主義を逆さに使つて帝国主義」に押した「豪傑」と評し、反帝国主義のアルトン・パーカーと比較する。

パーカーの候補演説によれば「レパブリカン〔共和〕党は防衛力乏しき外国人民の征服を以て主義とし、デモクラット〔民主〕党は自由を以て主義とする」。アメリカでさえ「征服が勝つて自由が負ける世の中」で、天上の星を数えようとする者は足元を掬われぬよう注意しなければならないと結んでいる。

日露戦争中に書かれたこの文章は、帝国主義の世界情勢認識と、そこで日本の立ち位置を考察している。陸羯南も近衛篤磨も、その思想や行動に侵略主義を読み取るのは難しくないが、彼らがこうしたリアリズムのなかに生きていたことを理解すべきだろう。自由の国アメリカでさえ帝国主義のルーズベルトが大統領に選ばれる時代にどう考え行動していくのか。帝国主義

という「世界の大勢」への一種の諦観を読み取ることができる。具体的な政策の主張には至らず心情の吐露に終わっているのは、良くも悪くもこの文章が「政論」ではなく「コラム」だからだろう。

一方、近衛篤磨は自らの雑誌『東洋』を『日本』の「日本週報」に合併させた創刊号で、日本が富力を増進するためには「盛に業を海外に営むに如くはなし」としたうえで以下のように述べる。

朝鮮八道支那四百州、天の賜へる富源にして未だ人の手に開かれず、農に、工に将た商業に、空しく遺利の累々として東隣先進国民の手を待つもの甚だ多し（「帝国今後の急務」『日本週報』35.1.13）

欧米列強の帝国主義的な侵略に対し、いわば受動的に立ち向かうべしとする姿勢と、清韓を未開発の市場と見て積極的に経済進出を行うべしとする姿勢は、世界の帝国主義的な趨勢を現実と受け止めている意味で表裏の關係に過ぎないのかもしれない。

3.2 心情的連帯主義とその媒体

以上、「雲間寸観」を手掛かりに古島一雄の東洋観を見てきた。古島は当時から清国人・朝鮮人に対して一貫して相手の立場を尊重し、国家どうし対等に向き合おうとする態度を示している。また中国の労働市場に着目し日本主導の産業発展に早くから着目していた近衛に比べると、古島にはそうした観点を拒絶しているというよりはもともと乏しく、人道的な義憤が前面に出ている。こうした人情的な東アジア観は、軍の人事や自分とも近い間柄であるはずの対外硬グループへの態度などに顕著に現れるものの、明治ジャーナリズムにありがちな政治献策は控えめである。これは明治的な「政論」による政策の提言ではなく「コラム」による所感の表明だから可能な発信の形式とも言える。

古島は人道的な正義感、あるいはより世俗的な人情からアジア連帯を志向したという意味では岡倉に近いが、最終的に対露開戦に同調し「正義の戦い」を主張した。また「雲間寸観」の話題は軍隊に関するものが多く、いわば武士的な価値観から軍事を重視した。

中島岳志は、竹内好が近代日本のアジア主義（竹内 1966=1993）を「政略としてのアジア主義」「抵抗としてのアジア主義」「思想としてのアジア主義」に分類していることに注目し、封建制や帝国主義への「抵抗としてのアジア主義」の「心情」が岡倉天心の「思想としてのアジア主義」には出会わず、思想に昇華しなかったことが、日本のアジア主義が大東亜共栄圏の侵略の論理に組み込まれた大きな要因であると指摘する（中島 2017:39）。

古島の立場は上記分類のなかの「抵抗としてのアジア主義」の中心にいた宮崎滔天や初期玄洋社に近い。大陸浪人的な東洋観とそれにもとづく対アジア政策観、いわば義侠的なアジア連帯主義である。政論新聞の編集長であった古島はこの「心情」を「思想」まで高める可能性を持っていた人物の一人に数えてもよいだろう。

しかし一方で、その可能性が本当にあったのかという疑念も同時に湧いてくる。日本新聞社を退社した古島は政教社の雑誌『日本及日本人』で同名のコラム「雲間寸観」を長期連載する。

『萬朝報』に移籍した後も「机の塵」「東西南北」といったコラム欄・短評欄を担当する。新聞記者としての古島は「政論」ではなく「コラム」を志向し、その政治熱は言論界での理論ではなく政界での実践の道を選択した。義侠的なアジア連帯主義はもともと「思想に昇華」されるには不向きなものだったのかもしれない。これを総合的にどう評価するかについては、稿を改めることにしたい。

● 文献

- 有山輝雄（2007）『陸羯南』吉川弘文館
- 石川徳幸（2019）「編集者としての五百木瓢亭」政経研究(56)3
- 岡倉天心（1904=2012）『茶の本・日本の目覚め・東洋の理想・付『東洋の目覚め』岡倉天心コレクション』筑摩書房
- 片山慶隆（2011）「陸羯南の対外論―日清戦争後を中心に―」日本史研究(583)
- 金野貞治（1956）『温軒鷺尾義直の面影』時習会
- 古島一雄（1950）『一老政治家の回想』中央公論社
- 坂野潤治（1974）「『東洋盟主論』と『脱亜入欧論』―明治中期アジア進出論の二類型―」佐藤誠三郎、R・ディンクマン編『近代日本の対外態度』所収、東京大学出版会
- 志賀重昂（1980）『明治文学全集 37 政教社文学集』筑摩書房
- 竹内好（1966=1993）『日本とアジア』筑摩書房
- 時任英人（1984）「古島一雄と犬養毅」政治経済史学(220)
- 中島岳志（2017）『アジア主義』潮出版
- 中野目徹（2014）『明治の青年とナショナリズム 政教社・日本新聞社の群像』吉川弘文堂
- 中村義（2005）「古島一雄と中国―アジア主義言論人にして立憲政党人―」史潮(57)
- 平石直昭（1994）「近代日本の『アジア主義』―明治期の諸理念を中心に―」溝口雄三ほか編『アジアから考える〔5〕 近代化像』所収 東京大学出版会
- 広瀬玲子（2004）『国粋主義者の国際認識と国家構想―福本日南を中心として―』芙蓉書房
- 朴羊信（2008）『陸羯南 政治認識と対外論』岩波書店
- 正岡子規（1984）『病床六尺』岩波書店
- 松田宏一郎（2008）『陸羯南―自由に公論を代表す―』ミネルヴァ書房
- 松本三之介（1965）「古島一雄」思想の科学(37)
- 丸山眞男（1947）「陸羯南 人と思想」中央公論(696)
- 鷺尾義直（1950）『古島一雄』日本経済研究會

（教育社会学コース 博士後期課程 1 回生）

（受稿 2022 年 8 月 30 日、改稿 2023 年 1 月 2 日、受理 2023 年 1 月 12 日）

新聞『日本』に見る古島一雄の東洋観

—時事短評欄「雲間寸観」を中心に—

戸松 幸一

古島一雄は明治期の新聞記者であり、大正期には衆議院議員となった。本稿は新聞『日本』にて事実上の編集長時代の古島一雄執筆の文章に注目する。対象は明治 34（1901）年から 37 年にかけて掲載された時事評論欄「雲間寸観」である。主に中国（清国）、朝鮮半島、満州問題で対立を深めるロシアへの態度を中心に分析する。古島は清国・朝鮮半島については同じアジア人として内在的な批判と詠嘆を述べる一方で、対露同志会など当時の対外硬勢力とは一定の距離を保った。対露同志会の近衛篤麿、「アジアの目覚め」を執筆した岡倉天心と比較して、古島の東洋観は素朴な人道主義に基づく義侠的なアジア連帯主義と呼べるものである。

Kojima Kazuo's View of the East, as Seen in the Newspaper, *Nippon*: Focusing on the Commentary Column, "Unkan Sunkan"

TOMATSU Koichi

Kojima Kazuo was a newspaper reporter in the Meiji era and a member of the House of Representatives in the Taisho era. This article focuses on a newspaper article written by him when he was the de facto editor-in-chief of the newspaper *Nippon*, specifically the commentary column, "Unkan Sunkan," published from 1901 to 1904. Primarily, I analyze the attitude toward China (Qing), Korea, Manchuria, and Russia expressed in the column. While as an Asian Kojima criticized and lamented Qing and Korea, he maintained a distance from the hard-line foreign powers of the time, such as the Tairō Doshikai. Kojima's view of the East is a chivalrous Asianism based on simple humanitarianism in contrast to that of Atsumaro Konoe of the anti-Russian Doshikai; and Tenshin Okakura, writer of *Awakening of Asia*.

キーワード：新聞『日本』、古島一雄、メディア史、アジア主義

Keywords: Newspaper *Nippon*, Asianism, Kojima Kazuo, Media History